

社会に開かれた学校教育の実現に向けて

カリキュラム・マネジメントの在り方

平成 29 年告示学習指導要領では、

- ① 教育課程を通して、子供たちが変化の激しい社会を生きるために必要な資質・能力の育成を目指していくこと
- ② 社会との連携・協働を重視しながら学校の特色づくりを図っていくこと
- ③ 現実の社会との関わりの中で豊かな学びを実現していくことが求められています。

教育課程を通して、これからの時代に求められる教育を実現していくためには、よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有し、それぞれの学校において、必要な学習内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを教育課程において明確にしながら、社会との連携及び協働によりその実現を図っていくという、社会に開かれた教育課程の実現が重要となる。

(小学校学習指導要領 前文より)

そして、

【第 1 章総則第 1 の 4】

各学校においては、児童生徒や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容を教科等横断的な視点で組織的に組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともに、その改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと（以下「カリキュラム・マネジメント」という。）に努めるものとする。

自校のミッションは何かを問い直し、「学校教育目標」実現のため保護者や地域の人々と協働して取り組みながら、学びの主体としての子供を育成しましょう。

※学校教育目標は、教育基本法・学習指導要領・長野県教育振興基本計画・長野市教育振興基本計画に基づいて、児童生徒や学校、地域の実態に合わせて立案する「ねらい」となります。



まずは、長野市教育振興基本計画の確認から

長野市教育の推進に当たっての基本的方向

- 1 次世代を担う子どもたちの「生きる力」の育成
- 2 地域に支えられ、親と子が共に学び育ち合う環境の充実
- 3 生きがいを求め、社会に参画する力を高める学びの機会の充実
- 4 多彩な文化・スポーツ資源を継承・創造し、全ての市民が享受できる文化力の向上

(第二次長野市教育振興基本計画)

次世代を担う子どもたちの「生きる力」の育成とは

※生きる力とは…

学校は、ひとつづくりの場です。

子どもたち一人一人が、かけがえのない尊厳を持った人間として自立し、先行きが不透明な社会を生き抜いていくために、これまで取り組んできた「基礎学力の定着」、「子どもたちの実態や地域の特色を生かした学習」を更に充実させるとともに、「創造性や豊かな感性」、たくましく生きるための「健康・体力」を育む主体的で協働的な深い学びを通して、子どもたちの「生きる力」の育成を目指します。



学校で学んだことが、将来につながるように…

	学校全体での取り組みは？	私の取り組みは？
基礎学力の定着		
子どもたちの実態や地域の特色を生かした学習		
主体的で協働的な深い学び		



教育の基本的方向

基本的方向1

次世代を担う
子どもたちの
「生きる力」の育成

基本的方向2

地域に支えられ、
親と子が
共に学び育ち合う
環境の充実

基本的方向3

生きがいを求め、
社会に参画する力を高める
学びの機会の充実

基本的方向4

多彩な文化・スポーツ
資源を継承・創造し、
全ての市民が享受できる
文化力の向上

今後5年間に取組む基本施策及び施策

基本施策1 子どもたちの「生きる力」を育成する教職員の力量の向上

1-1-1 教職員研修の充実

基本施策2 乳幼児期からの段階に応じた教育の充実

1-2-1 乳幼児期の教育の充実

1-2-2 小・中学校の教育の充実

1-2-3 高等学校・大学等の教育の充実

1-2-4 幼・保・小・中・高の連携の充実

基本施策3 安心・安全な教育環境の整備

1-3-1 安心・安全な学校施設の整備

1-3-2 子どもたちの健康の保持・増進

1-3-3 日常の安心・安全の向上

1-3-4 少子・人口減少社会に応じた活力ある学校づくりの推進

基本施策4 一人一人を大切に教育の推進

1-4-1 個々の実態に応じた相談体制の充実

1-4-2 特別支援教育の充実

1-4-3 社会的援助を必要とする子どもへの支援

基本施策1 家庭・地域・学校の連携・協働による教育力の向上

2-1-1 家庭の教育力の向上

2-1-2 地域の教育力の向上

2-1-3 家庭・地域・学校・事業所の連携・協働の充実

基本施策2 地域が子どもの育ちを支える環境の充実

2-2-1 「放課後子ども総合プラン」の充実

2-2-2 少子・人口減少社会に応じた活力ある学校づくりの推進(再掲)

基本施策1 学びの機会を支える生涯学習環境の充実

3-1-1 生涯学習センター・公民館の充実

3-1-2 図書館・博物館その他生涯学習施設の充実

基本施策2 豊かな生活につながる生涯学習の推進

3-2-1 学習成果を生かした地域づくりへの参加促進

3-2-2 高齢者や障害者の豊かな生活の支援

3-2-3 人権尊重・男女共同参画の推進

基本施策1 多彩な資源を生かした文化芸術・スポーツ創造環境の構築

4-1-1 文化芸術活動への支援と文化の創造

4-1-2 歴史・文化遺産の活用と継承

4-1-3 生涯スポーツの振興

基本施策2 国際交流・多文化共生の推進

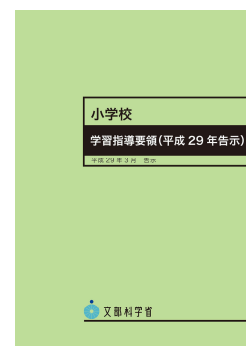
4-2-1 国際交流活動の推進

4-2-2 多文化共生の推進

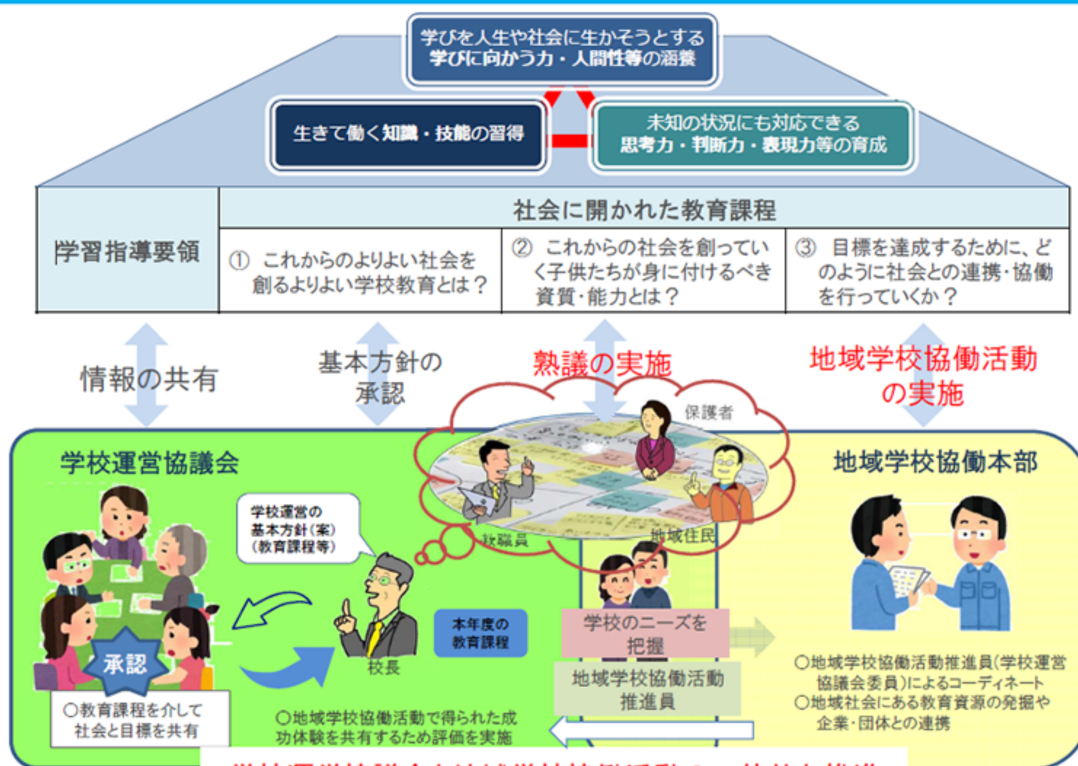
[序] 社会に開かれた教育課程

【教育課程とは】

学校教育の目的や目標を達成するために、
教育の内容を子供の心身の発達に応じ、
授業時数との関連において
総合的に組織した学校の教育計画



地域と学校の連携・協働 ―社会に開かれた教育課程の実現



学校運営協議会と地域学校協働活動の一体的な推進

(文部科学省の資料より)

知・徳・体にわたる「生きる力」を子供たちに育むために、
「何のために学ぶのか」という各教科等を学ぶ意義を共有しな
がら、授業の創意工夫や教科書等の教材の改善を引き出してい
くために、全ての教科等の目標及び内容が「知識及び技能」
「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」
の三つの柱で再整理することが大切です。



I. カリキュラム・マネジメントのねらい

～「社会に開かれた教育課程」を目指して～

1. 学校教育目標と教育課程の編成について

【第1章総則第2の1】

教育課程の編成に当たっては、学校教育全体や各教科等における指導を通して育成を目指す資質・能力を踏まえつつ、各学校の教育目標を明確にするとともに、教育課程の編成についての基本的な方針が家庭や地域とも共有されるよう努めるものとする。その際、第5章総合的な学習の時間の第2の1に基づき定められる目標との関連を図るものとする。

学校教育目標を
学習指導要領で
チェック



学校教育目標は、教育基本法などの法律に定められている教育の目的や目標、長野市教育振興基本計画等を踏まえ、地域や学校の実態に即して、子供たちの資質・能力の育成に向けて設定するのか。

「だれ」が、「いつ」、「どうやって」決めるのかな？

[本校の学校教育目標]



だれが、いつ、決めたのかな？

学校教育目標で使われている言葉のベスト・ファイブ

小学校＝①「心の教育 豊かな心」、②「健康 体力」、③「思いやり」、
④「自ら学ぶ力 自己学習力」、⑤「生きる力」

中学校＝①「心の教育 豊かな心」、②「健康 体力」、③「自ら学ぶ力
自己学習力」、④「自立 自主 主体性」、⑤「思いやり」

※「第3回学習指導基本調査」ベネッセ(2002)より



○校訓と学校教育目標



子供たちにわかりやすく、親しみのもてる表現でかつ、教育のめざす本質や普遍的な教育理念が盛り込まれていることが、学校教育目標の必要条件といえます。

その意味で、教育実践の場において、「もっとも大切なもの」「重要なもの」であるはずの学校教育目標ですが、日常的に教職員一人一人がこの学校教育目標を意識しているかと問われると、いささか曖昧な存在となっているのも実際でしょう。



それは、校訓と学校教育目標とが、曖昧なまま存在している、もしくは学校教育目標が校訓化していることが一因かもしれません。

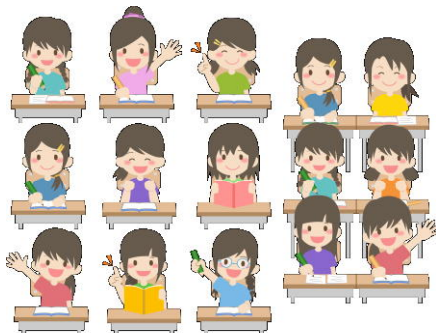
校訓は、人間形成に当たってとりわけ大切にしたい教育理念や教養を成文化し、学校生活の指針としたものといえ、長期にわたって維持されることが多いといえます。

しかし、学校教育目標は、時々々の状況に即して、子供たちの資質・能力を「どのようにして」育成するかというある意味短期的な目標設定が前提で、PDCA サイクルによる評価により、進化していくものといえます。

「校訓を活かした学校づくりの在り方について（報告書）」文部科学省（平成 21 年）では、「学校教育目標と校訓との関係性を明確にし、体系的に目標を整理することで、学校教育活動の核として、校訓を『教育目標の後ろ盾』としている場合もあり、学校づくりの在り方として、一つの重要な方向性を示すものと期待される」と指摘しています。

つまり、目の前の子供たちの姿を踏まえながら、学校教育目標は不断の見直しを図ることが必要だということです。

そのため、各校では子供の発達段階や地域の実態に即して、学校教育目標を教職員全員で練り、その具現化のための教育課程を編成し、教職員一人一人がカリキュラム・マネジメント能力を発揮し、教育実践を展開する中で、教育課程を評価し改善していくことが求められています。



【カリキュラムマネジメントとは】

各学校が教育目標をよりよく達成するために、組織としてカリキュラムを造り、動かし、変えていく、継続的かつ発展的な、課題解決の営み

※田村知子編著「実践カリキュラムマネジメント」ぎょうせい(2011)

○カリキュラム・マネジメントによる学校教育目標の実現



学校教育目標の実現には、実用的な重点目標の設定が必要です。

SWOT等の実態把握で学校内外の強みと課題をピックアップできたら、「重点 目標」を設定してみましょう。

設定した重点目標が「絵に描いた餅」になってしまっては、意味がありません。

「SMART」とは、Specific（目標が明確、具体的）、Measurable（測定可能な）、Achievable（達成可能な）、Realistic（現実的な）、Time-bound（期限のある）の頭文字をとって、SMARTの法則と呼ばれている具体的でわかりやすく、達成可能な目標設定のための考え方です。

「SMART」という視点で、実用的な目標を設定してみましょう。



①Specific（目標が明確、具体的）



どのような目的で目標が設定されたのか、内容は具体的にになっているか。

②Measurable（測定可能な）



誰が見ても達成度が判断できるようになっているか。

③Achievable（達成可能な）



達成が可能な内容になっているか。

難しい目標では、やる気が失せてしまいます。

④Realistic（現実的な）

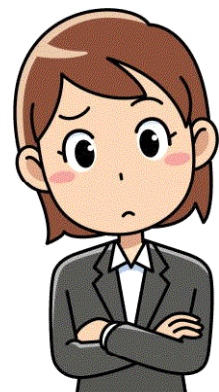


現実的な目標か、無理をした目標ではないか。

⑤Time-bound（期限のある）



いつまでに達成する目標なのか。

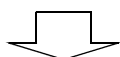


※ SMART という考え方は、教育という営みすべてを測定可能で、予測可能なものとして標準化してしまう危険性も潜んでいるので、多様性・予測不能の視点も意識しましょう。

2.子供たちの資質・能力と教育課程の編成について

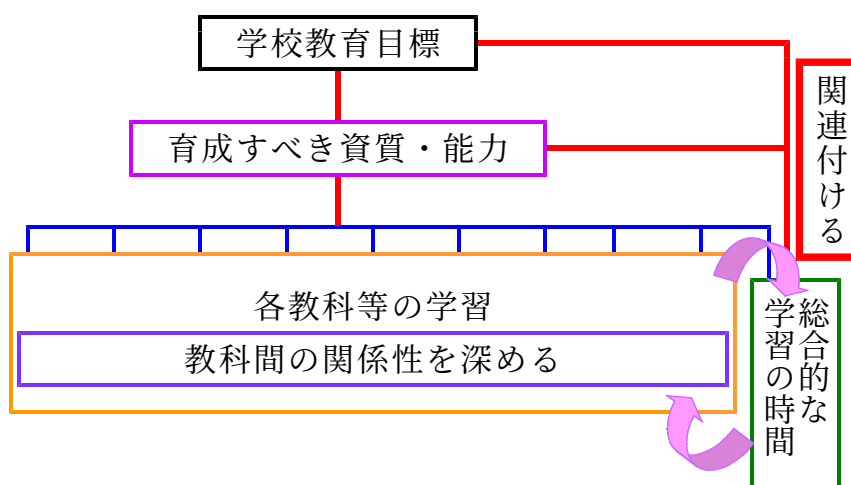
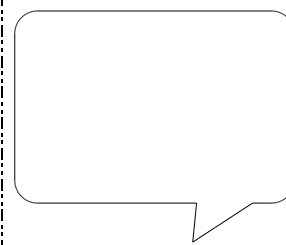
【ポイント】

各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成を目指す教育課程を創造する。

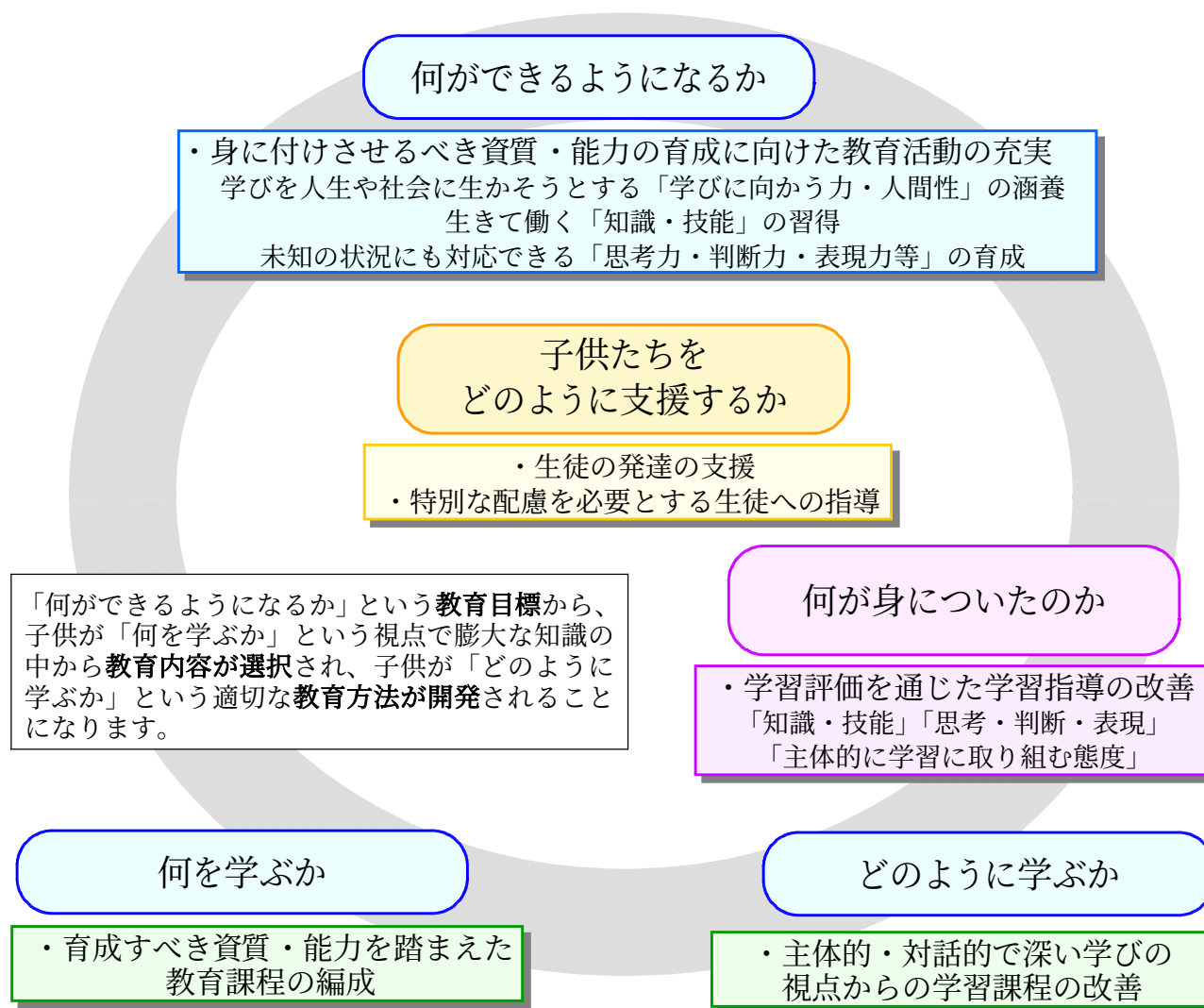


【小学校学習指導要領第1章総則第2の2】

- (1) 各学校においては、児童の発達の段階を考慮し、言語能力、情報活用能力（情報モラルを含む。）、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力を育成していくことができるよう、各教科等の特質を生かし、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図るものとする。
- (2) 各学校においては、児童や学校、地域の実態及び児童の発達の段階を考慮し、豊かな人生の実現や災害等を乗り越えて次代の社会を形成することに向けた現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力を、教科等横断的な視点で育成していくことができるよう、各学校の特色を生かした教育課程の編成を図るものとする。



学校教育目標が十分に意識されないと、教科書の内容をそのまま教える授業や、これまでも実施してきたからと例年通りの行事や総合的な学習の時間等の実施ということになる可能性があります。学校教育目標を具現化するために育成すべき資質・能力は何かを明確にして教育課程を編成することが大切です。

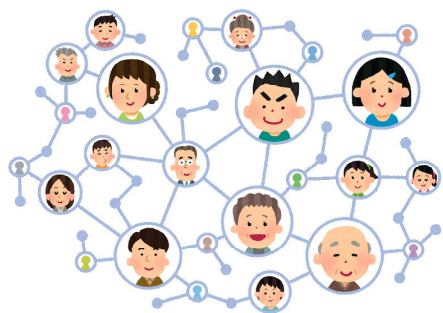


〔学習の基盤となる資質・能力と学習活動の関係について〕

- 言語活動を通じて育成される【**言語能力（読解力や語彙力等を含む）**】
- 言語活動やICTを活用した学習活動等を通じて育成される【**情報活用能力**】
- 問題解決的な学習を通じて育成される【**問題発見・解決能力**】
- 体験活動を通じて育成される【**体験から学び実践する力**】
- 「対話的な学び」を通じて育成される【**多様な他者と協働する力**】
- 見通し振り返る学習を通じて育成される【**学習を見通し振り返る力**】など

※中教審答申(平成28年12月)

3.地域社会との連携による教育課程の編成とは



—小学校学習指導要領第1章第5-2-ア—

学校がその目的を達成するため、学校や地域の実態等に応じ、教育活動の実施に必要な人的又は物的な体制を家庭や地域の人々の協力を得ながら整えるなど、家庭や地域社会との連携及び協働を深めること。また、高齢者や異年齢の子供など、地域における世代を越えた交流の機会を設けること。

学校教育目標の実現に向けては、到達目標の共有をはじめ全教職員の協働性が必要ですが、「社会に開かれた教育課程」という理念を踏まえると、家庭や地域との協力関係も含めたチーム・ネットワークの構築も重要な要素となります。

そこで、教育内容と教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせて考えてみましょう。

地域等の外部の資源の活用としては、地域素材を活用した教材開発を地域の方と協働で実施したり、地域と連携した体験的学習活動や、学習支援活動など多様な活用が考えられます。

実践例：「味噌の復活は復興のシンボル」（総合的な学習の時間）市立長野中学校1年

○地域の「キセキのみそ復活！プロジェクト」への参加



NPO「コラボ」の方々による
生徒の学習へのアドバイス

イメージマップに書き込まれた学習内容

A生

味噌作り見学・体験→キセキの味噌の魅力を調べる→大豆作りから味噌作りまでのことをまとめたパンフレットや動画を作成する→5期生(後輩)に紹介する

(学習カードから)

N生：今までのプロジェクトの内容は先生が教えてくださっていたけど、これからは自分たちなので、気をひきしめていきたい。

R生：ボランティアなどに参加するときに、行事としていくのではなく自分が何のために参加しているのか、何のためのボランティアなのかを考えたい。

M生：味噌の復活は復興のシンボルになるだろうし、大豆で何か作って被災した方や小川さんにふるまいたい。

【ポイント】

教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、地域の教育資源を活用した教育課程を編成し、地域の方々と協働で実施し、情報を共有し評価して改善を図っていくことです。



「これからの学校と地域 コミュニティ・スクールと地域学校協働活動」(文部科学省:令和2年)における地域学校協働活動例も参考になります。

○学びによるまちづくり・地域課題解決型学習・郷土学習

- ・地域資源を理解し、その魅力を伝えたり、地域活性化のための方策を考え、実行する学習活動
- ・「ふるさと」について地域住民から学び、自ら地域について調べたり発表したりする学習活動
- ・地域の産業や商店街の職場体験学習、郷土の伝統・文化芸能学習 など

○学校に対する多様な協力活動

- ・登下校の見守り、花壇や通学路等の学校周辺環境の整備、子供たちへの本の読み聞かせ、授業の補助や部活動の支援、企業等による出前授業等の教育プログラムの提供 など

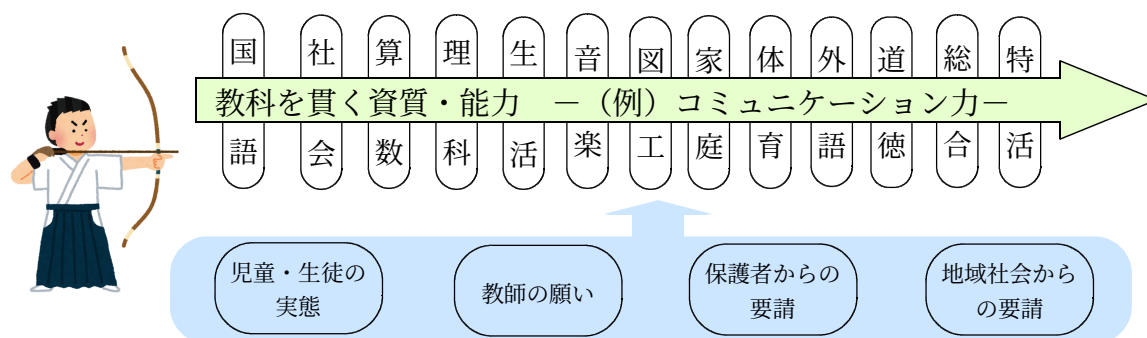


Ⅱ. カリキュラム・マネジメント ～3つの側面～

1. 教科横断的な視点からのアプローチ

教科横断的な配列といったとき、「音楽で1学期に海の歌をやるから、社会では水産業を扱って、理科では海水の塩分濃度を計って…」と各教科の学習の足並みを揃えるというのは、コンテンツをそろえているだけなので「教科横断的な視点」からはズレてしまいます。

それぞれの教科学習の目的である資質・能力の育成という観点から、どのような関連性が見出せるかという視点で配列を考えることが大切です。つまり、児童・生徒の実態、教師の願いや保護者・地域の要請等から、学校全体で育成に取り組むべき資質・能力を設定し、すべての教科で具現化を検討し、実践するということになります。このことは、各教科等の目標を達成すると同時に、教科等横断的な視点に立って汎用的な資質・能力の育成を図る取組みといえます。



①各教科の目的を確認してみましょう。

学習指導要領は、**教科を学ぶ意義(目的)**と**教育内容**の全体像が俯瞰できるように、「学びの地図」として、

- ・「何ができるようになるのか」…育成を目指す資質・能力
- ・「何を学ぶか」…教科等を学ぶ意義と、教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成
- ・「どのように学ぶか」…各教科等の指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実等

の観点で整理されています。

また、教科の学習で育成を目指す**資質・能力**は、

「知識・技能」…何を理解しているか、何ができるか
「思考力・判断力・表現力等」…理解していること・できることをどう使うか
「学びに向かう力・人間性等」…どのように社会・世界と関わり、よりよい
人生を送るか

の三つの柱で整理されています。

そして、教科の目的を確認する際のキーワードは、各教科等の目標にある「**見方・考え方**」として示されています。この**見方・考え方**は、各教科等の特質に応じた物事をとらえる視点や考え方であり、教科等の教育と社会をつなぐものといえます。例えば、社会科では「**社会的な見方・考え方**」として示されています。

社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、（広い視野に立ち）グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す。 ※（広い視野に立ち）は、中学校社会科の目標

つまり、児童・生徒が各教科等の特質に応じた**見方・考え方**を働かせながら、

- ・ 知識を相互に関連付けてより深く理解したり
- ・ 情報を精査して考えを形成したり
- ・ 問題を見いだして解決策を考えたり
- ・ 思いや考えを基に創造したりする

（小学校学習指導要領第1章第3を参照）



学習が展開されるように、教育課程を編成することになります。

【ポイント】

身に付けた**資質・能力**の三つの柱によって支えられた「**見方・考え方**」が、**習得・活用・探究**という学びで働かせることで、新たな**資質・能力**が育まれるととらえると、「**見方・考え方**」を働かせることと**資質・能力**の育成は相互の関係にあるといえます。



「学びの地図」に基づいた各教科等の目標を確認しよう。

※学習指導要領を読んで、空欄を埋めてみましょう

教科等	見方・考え方、学び方	資質・能力
国 語	言葉による見方・考え方を働かせ、 言語活動を通して、	国語で正確に理解し適切に表現 する資質・能力
社 会		
算 数 数 学		
理 科		
生 活		
音 楽		
図 工 美 術		
家 庭 技 術		
体 育 保 健		
外国語		
道 徳		
総合的 な学習		
特 別 活 動		

② 現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力

小学校学習指導要領第1章総則第2の2の(2)では、「次代の社会を形成することに向けた現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力を，教科等横断的な視点で育成」するとしています。なお、現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力について、中教審答申（平成28年12月）で、以下の内容が示されています。

「健康・安全・食に関する力」
「主権者として求められる力」
「新たな価値を生み出す豊かな創造性」
「多様な他者と協働しながら目標に向かって挑戦する力」
「地域や社会における産業の役割を理解し地域創生等に生かす力」
「自然環境や資源の有限性等の中で持続可能な社会をつくる力」
「豊かなスポーツライフを実現する力」 等

どの項目も、未来に生きる子供たちに必要な力といえ、教育課程編成に際して、地域の実態や特色、家庭・地域との連携や協働など考慮して、これら資質・能力を育成する教育活動を創造していくことが求められています。

また、教育内容の系統や教科等での扱いについては、学習指導要領解説総則編の付録6で以下の内容について詳しく示されていますので、確認してみましょう。

伝統や文化に関する教育
主権者に関する教育
消費者に関する教育
法に関する教育
知的財産に関する教育
郷土や地域に関する教育
海洋に関する教育
環境に関する教育
放射線に関する教育
生命の尊重に関する教育
心身の健康の保持増進に関する教育
食に関する教育
防災を含む安全に関する教育



③ 育成を目指す資質・能力の関係について



[育てたい力(資質・能力)を確認してみよう]

教科横断的な視点に立って資質・能力を考えてみましょうといっても、ハードルが高いので、まずは、児童・生徒のよいところと課題を明確にして、どんな力(資質・能力)を身に付けさせたいかを考えて、その具現化のために各教科等の学習で何ができるかを考えて、教職員全体で情報共有してみましょう。

学校教育目標

担当している児童・生徒の
よいところ

担当している児童・生徒の課題

育てたい力

育てたい力

育てたい力

こんな工夫ができそう
(この教科で)

こんな工夫ができそう
(この教科で)

こんな工夫ができそう
(この教科で)

参考文献:「豊かな学びをつなぐカリキュラム・マネジメントハンドブック」京都府総合教育センター(2020)

④ 言語活動の充実との関係について



育てたい力のデータを基に、各教科等の目的を意識し、それぞれの教科の教育内容を相互の関係でとらえ、教科横断的な視点で、育てたい資質・能力を設定し、教育の内容を組織的に配列してみましょう。

例「言語活動の充実」に視点を当てたら

教 科	教科で育成する資質・能力	言語活動の充実に関わる活動
国 語		
社 会		
算 数		
数 学		
理 科		
生 活		
音 楽		
図 工		
美 術		
家 庭		
技 術		
体 育		
保 健		
外国語		
道 徳		
総合的 な学習		
特 別 活 動		

⑤ 学校段階等の接続と系統性について

小学校学習指導要領第1章総則第2の3の(3)のイでは「指導計画の作成等に当たっての配慮事項として」

各教科等及び各学年相互間の関連を図り、系統的、発展的な指導ができるようにすること

とされ、中学校学習指導要領第1章総則第2の4の「学校段階間での接続」では、

- (1) 小学校学習指導要領を踏まえ、小学校教育までの学習の成果が中学校教育に円滑に接続され、義務教育段階の終わりまでに育成することを目指す資質・能力を、生徒が確実に身に付けることができるよう工夫すること
- (2) 高等学校学習指導要領を踏まえ、高等学校教育及びその後の教育との円滑な接続が図られるよう工夫すること。

枠組み	地理的環境と人々の生活			現代社会
	地 域	日 本	世 界	経済・産業
小学校	3年	(1) 身近な地域や市の様子 イ「仕事の種類や産地の分布」		(2) 地域に見られる生産や販売の仕事
	4年	(1) 県の様子 ア「4/ 都道府県の名前と位置」 (5) 県内の特色ある地域の様子		(2) 人々の健康や生活環境を 内容の取扱い (3)イ「開発、産業などの事例(選択)」
	5年	(1) 我が国の国土の様子と国民生活 イ「生産物の種類や分布」 イ「工業の盛んな地域の分布」 (5) 我が国の国土の自然環境と国民生活との関連	世界の大陸と主な海洋、主要国々	ア「自然環境に適応して生活していること」 (2) 我が国の農業や水産業における食料生産 (3) 我が国の工業生産 (4) 我が国の情報と産業との関わり (5) 我が国の国土の自然環境と
	6年		世界の人の生活の様子	
中学校	地理的分野	A (1) ② 日本の地域構成 C (1) 地域調査の手法 C (2) 日本の地域的特色と地域区分 C (3) 日本の諸地域 C (4) 地域の在り方	世界の地域構成 世界各地の人々の生活と環境 世界の諸地域	③ 資源・エネルギーと産業 ③ 産業を中核とした考察の仕方
	歴史的分野			
	公民的分野	(1) 「少子高齢化」	(1) 「情報化、グローバル化」	A (1) 私たちが生きる現代社会 A (2) 現代社会を捉える枠組み B 私たちと経済 (1) 市場の動きと経済 (2) 国民の生活と政府の役割

とされています。

つまり、子供たちが「何を」「どのように」学ぶことで、「どのような力」を身につけていくのかという学びの系統と、それぞれの学校段階がその前後の段階との接続とを意識し、子供たちの資質・能力を育成する教育課程を編成することが重要となります。

各教科等の教育内容や育成すべき資質・能力の系統については、各教科等の学習指導要領の解説に示されています。発達段階の「たて」の系統と領域間の「横」の系統を確認しましょう。

(例：社会の系統。「小学校学習指導要領解説 社会編」より)

市立長野中学校の例

総合的な学習の時間の展開を系統立ててみた



2. 教育活動における PDCA サイクルの確立からのアプローチ

① PDCA サイクルとOODA ループの組み合わせで教育課程の改善を

PDCA サイクルの P は計画 (Plan)、D は実施 (Do)、C は評価 (Check)、A は改善 (Action) を指していて、教育課程の改善や授業改善のひとつの方法といえます。この PDCA サイクルを確立させるためには、指導と評価の一体化が必要で、そのために児童・生徒にどのような資質・能力を身につけさせたいかを明確にした学校の全体構想に基づいた教育課程の編成が必要となります。

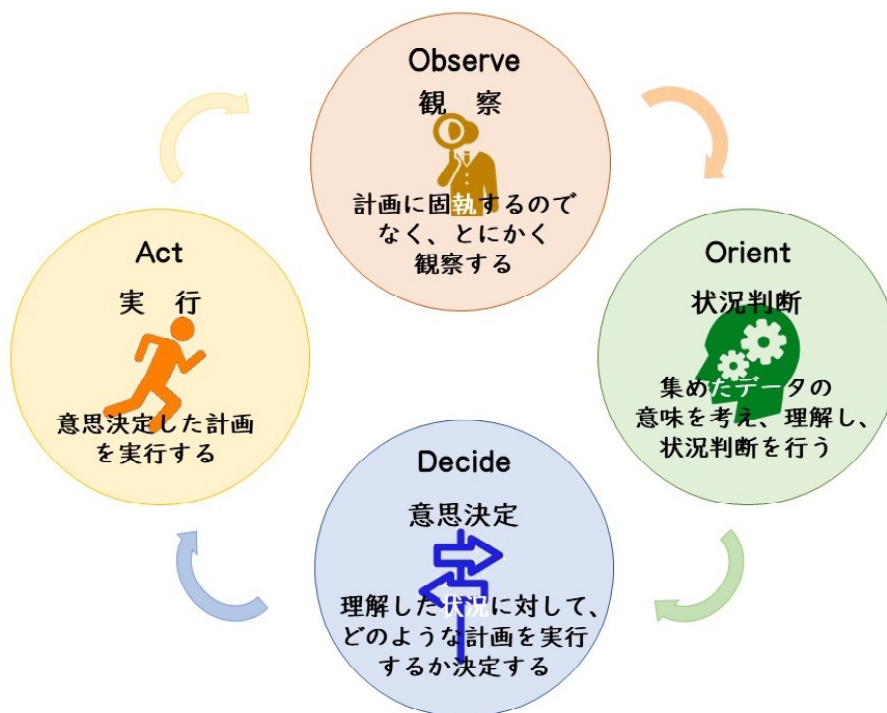
その意味で、「カリキュラム・マネジメント」は、全ての教職員が参加することによって、学校の特色を作り上げていく「営み」といえ、一度計画して終わりというものではありません。常に「計画」→「授業実践」→「評価」→「指導内容・教育方法の改善」という PDCA サイクルで、不断の見直しを図ることが必要となります。そして、この PDCA サイクルは、学校全体の大きなサイクルだけではなく、グループや教科による取組はもちろん、一人ひとりの教職員の取組についても PDCA サイクルを意識することが重要となります。

このような不断の見直しを図り、PDCA サイクルを実施していくためには、その実施状況を把握するための情報収集の在り方、収集した情報や各種データを、どのように活用するかも重要になります。特に、学習評価については、児童・生徒の学びの結果としての評価に留まらず、「カリキュラム・マネジメント」の中で、教育課程や学習・指導方法に対する評価と結び付け、授業改善や組織運営の改善に向けた、学校教育全体のサイクルの中でとらえていくことが大切です。



OODAループ

先の読めない状況で成果を出すための意思決定方法



OODAループは、アメリカ空軍のジョン・ボイド大佐によって提唱された即時判断が求められた際の意思決定方法です。

ジョン・ボイド氏は、空中戦でどんなに不利な状況からであっても、40秒あれば形勢を逆転できたということで、「40秒ボイド」と呼ばれましたが、その秘訣は、どんなに先

の见えない状況の中でも迅速に意思決定を下し、迅速に行動に移すということでした。ボイド氏野石蹴って一連の流れを抽象化したものが、「観察 (Observe)」「状況判断 (Orient)」「意思決定 (Decide)」「実行 (Act)」の4ステップで、頭文字をとって「OODA」というわけです。

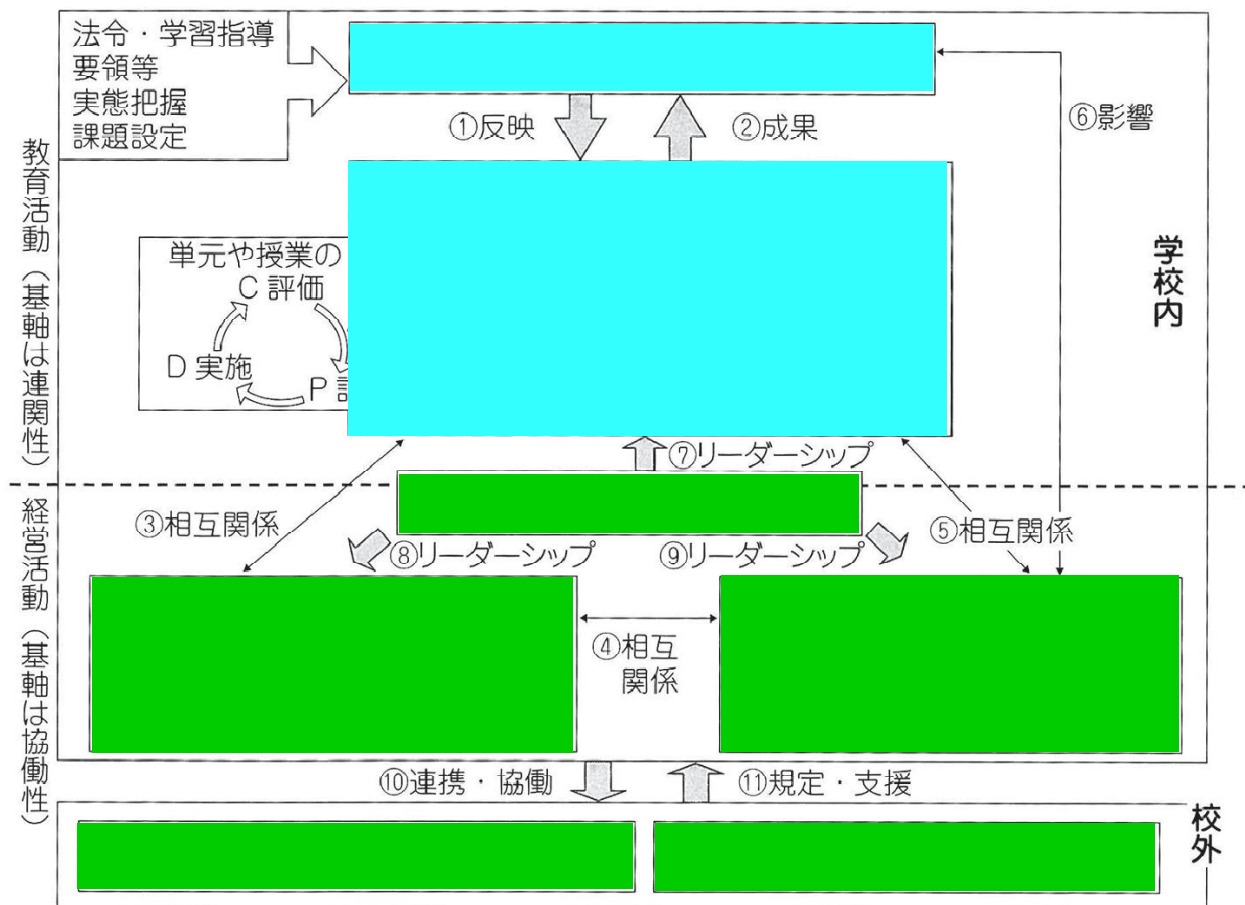
教育実践も、常に子供たちと先生方との真剣勝負と考えると、この意思決定の在り方の重要性がおわかりいただけると思います。

では、PDCAサイクルとの関係はというと、長期で評価するPDCA、短期で評価改善するOODA程度に考えてもらおうとわかりやすいと思います。

そもそもPDCAサイクルは、工場での生産速度や生産効率といった「決められた工程をいかに低いコストで進め、高い生産性を発揮するか」という課題に対する改善を図るフレームワークとして開発されてきています。ですから、PDCAサイクルは学校教育目標に基づいて編成された教育課程といった長期計画の改善に最適なフレームワークです。しかし、教育実践は单元という短期スパンで実行されると同時に、児童・生徒の反応により計画を逐次変更して行かざるを得ないという側面が、実施過程が曖昧なものに対しては、あまり効果的ではないと言われています。そこで、短期で評価が行われるものについては、OODAループの考え方で実施した方が現実的といえるでしょう。

「カリキュラムマネジメント・モデル」を活用した分析

「カリキュラムマネジメント・モデル」を活用することでカリキュラム・マネジメントの全体像を把握し、各要素とそのつながりを俯瞰的に分析してみましょう。



(田村知子編著『カリキュラムマネジメントハンドブック』(ぎょうせい、2016) より)



分析のポイント

教育の目標・内容・方法系列の要素

ア…「育成を目指す資質・能力」が明確で、教職員、児童・生徒、保護者、地域の関係者等と共有されているか。

イ…カリキュラムを見直しの手立てとして、PDCAが機能しているか

条件整備系列の要素

ウ…教職員全体で、授業に必要な人・物・予算・組織について、切実感を持って考えているか

エ…ヒドゥン・カリキュラムとしての教職員の「組織文化」、児童・生徒が共有している「生徒文化」、学校に定着した「校風文化」等を意識し、把握しているか

オ…授業研究の際に指導・助言するなど直接的に教育活動に働きかける教育的リーダーシップ⑦、人的・物的環境を整備することで間接的に教育活動を支援する管理・技術的リーダーシップ⑧、学校内の人間関係や校風をポジティブなものに変えることで教育活動を活性化する文化的リーダーシップ⑨が、どのように機能しているか

カ…保護者、地域社会、企業といった外部関係者との連携はどうなっているか

キ…行政支援を効果的・有効に活用しているか

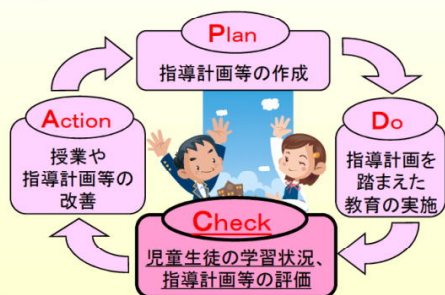
② 学習評価について

授業改善の視点からPDCAサイクルを確認してみましょう。

学習指導と学習評価のPDCAサイクル

○ 学習評価を通じて、学習指導の在り方を見直すことや個に応じた指導の充実を図ること、学校における教育活動を組織として改善することが重要。

指導と評価の一体化



「学力調査」、「観点別学習状況の評価」、
「児童・生徒による授業評価」などの活用。



実態
把握



児童・生徒に到達させたい内容（結果）を明確にする（評価の設定）

※キーワードは「見方・考え方」「資質・能力」

何が目的か／子どもが担う役割は何か／
想定される状況は／生み出すべき作品は何か

Plan（計画）…教育目標の設定・教育課程の編成・指導計画の作成

課題解決に向けて、具体的にどのような授業改善を行うか検討し、実施計画を立てる。（学習経験と指導の在り方、評価の方法を計画する）

Do（実践）…主体的・対話的で深い学びの視点からの学習の充実を図る

実施計画に基づいた授業を実践する。

Check（評価）…観点別学習状況の評価、児童・生徒による授業評価等

目標、指導計画や授業改善について評価する。

Action（改善）…学習指導の改善、
教材研究の充実へ

評価の結果を分析して整理し、次の授業実践につなげる。

PDCAのチェックの基本

やったこと	次にやること
わかったこと ・良かったこと ・改善が必要なこと	

③ 年間指導計画を基にしたカリキュラムの評価について

単元配列表を用いて一年間の学習活動を俯瞰で見渡し、「育てたい力」との対応や「学習内容」のつながりを視覚的に把握することで、カリキュラム・マネジメントの三つの側面の一つである「教科等横断的な学習活動」への意識を、全教職員で共通確認することができます。

また、「社会に開かれた教育課程」の実現という観点から、保護者や地域に学校の活動を発信することも効果的といえるでしょう。

ポイントは、教職員全員で一年間の学習活動を俯瞰し、単元一つ一つの位置付けや、つながりを確認することです。

得てして、単元配列表を作成することが目的になってしまうことがあります。教職員全員で、単元構想や授業づくりを考えるきっかけ作りにチャレンジしてみましょう。

職員研修として、フレームだけ作っておき、付箋紙に単元名や育てたい資質・能力を書き、議論しながら表を作成していくというワークも有効といえます。

令和2年度 ○○中学校 2学年 年間指導計画

月/教科	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	総時数
行事	砂漠探検学習		運動会		りんどう祭			校友会正副会長選挙	校友会引き継ぎ				
国語	見えにくいアイヌフラナット	授業で多様な方法で情報を集めよう 読者の視点	生物が記述する科学 読者の視点	新しい短歌のために 読者の視点	世界で一番の贈り物 読者の視点	土佐藩 読者の視点	モアイは語る 読者の視点	若は「最後の晩餐」 読者の視点	読者の視点	読者の視点	読者の視点	読者の視点	140
社会	日本のさまざまな地域 日本の姿	世界から見た日本の 姿	世界から見た日本の 姿	世界と日本の結びつき	ヨーロッパ人の出会い と全国一 江戶幕府の成立と幕府	幕府の衰退と幕府政 府の動き 九州地方	中国・西国地方 近畿地方	中国地方 近畿地方	東北地方 北海道	日本をながめて 幕府と近代日本の歩み	明治維新 幕府の衰退と日本の 開国	日本・日露戦争と近代 産業	105
数学	式の計算	連立方程式	一次関数				図形の調べ方		図形の性質と証明		確率		105
理科	物質のなり立ち	物質どうの化学変化 物質がわかる化学変化	化学変化と物質の性質 化学変化とその利用	生物と細胞 動物から見た細胞	植物の分類 動物の分類	動物の分類 動物の分類	動物の分類 動物の分類	動物の分類 動物の分類	動物の分類 動物の分類	動物の分類 動物の分類	動物の分類 動物の分類	動物の分類 動物の分類	140
音楽	「夢の世界」	「夢の世界」	「夢の世界」	「夢の世界」	「夢の世界」	「夢の世界」	「夢の世界」	「夢の世界」	「夢の世界」	「夢の世界」	「夢の世界」	「夢の世界」	35
総合	「はたらく」ことを考える (70時間) ・どんな仕事があるんだろう ・「はたらく」人たちの思いに触れる												70
美術	私のためのデザイン	私のためのデザイン	私のためのデザイン	私のためのデザイン	私のためのデザイン	私のためのデザイン	私のためのデザイン	私のためのデザイン	私のためのデザイン	私のためのデザイン	私のためのデザイン	私のためのデザイン	35
保健	体づくり運動 「オリエンテーション」 「スポーツテスト」	体づくり運動 「オリエンテーション」 「スポーツテスト」	体づくり運動 「オリエンテーション」 「スポーツテスト」	体づくり運動 「オリエンテーション」 「スポーツテスト」	体づくり運動 「オリエンテーション」 「スポーツテスト」	体づくり運動 「オリエンテーション」 「スポーツテスト」	体づくり運動 「オリエンテーション」 「スポーツテスト」	体づくり運動 「オリエンテーション」 「スポーツテスト」	体づくり運動 「オリエンテーション」 「スポーツテスト」	体づくり運動 「オリエンテーション」 「スポーツテスト」	体づくり運動 「オリエンテーション」 「スポーツテスト」	体づくり運動 「オリエンテーション」 「スポーツテスト」	105
技家	衣生活と自立(家)	衣生活と自立(家)	衣生活と自立(家)	衣生活と自立(家)	衣生活と自立(家)	衣生活と自立(家)	衣生活と自立(家)	衣生活と自立(家)	衣生活と自立(家)	衣生活と自立(家)	衣生活と自立(家)	衣生活と自立(家)	70
英語	「LIFE」 「LIFE」 「LIFE」	「LIFE」 「LIFE」 「LIFE」	「LIFE」 「LIFE」 「LIFE」	「LIFE」 「LIFE」 「LIFE」	「LIFE」 「LIFE」 「LIFE」	「LIFE」 「LIFE」 「LIFE」	「LIFE」 「LIFE」 「LIFE」	「LIFE」 「LIFE」 「LIFE」	「LIFE」 「LIFE」 「LIFE」	「LIFE」 「LIFE」 「LIFE」	「LIFE」 「LIFE」 「LIFE」	「LIFE」 「LIFE」 「LIFE」	140
道徳	上級生として生活する	上級生として生活する	上級生として生活する	上級生として生活する	上級生として生活する	上級生として生活する	上級生として生活する	上級生として生活する	上級生として生活する	上級生として生活する	上級生として生活する	上級生として生活する	35

④ カリキュラム評価を基にした学校評価について



【小学校学習指導要領第1章総則第5の1のア】

各学校においては、校長の方針の下に、校務分掌に基づき教職員が適切に役割を分担しつつ、相互に連携しながら、各学校の特色を生かしたカリキュラム・マネジメントを行うよう努めるものとする。また、各学校が行う学校評価については、教育課程の編成、実施、改善が教育活動や学校運営の中核となることを踏まえ、カリキュラム・マネジメントと関連付けながら実施するよう留意するものとする。

カリキュラム・マネジメントは、学校教育に関わる様々な取組を、教育課程を中心に据えて組織的かつ計画的に実施し、教育活動の質の向上につなげていくものです。

教育活動の質の向上とは、校務分掌において全教職員が適切に役割を分担し、相互に連携し、児童・生徒の実態や地域の実情、指導内容を踏まえて効果的な年間指導計画等の在り方や、授業時間や週時程の在り方等について、校内研修等を通じて研究を重ね、学校の特色を創り上げていくことといえます。

その意味で、この教育課程を中心として教育活動の質の向上を図るカリキュラム・マネジメントは学校評価との関連の中で考えることが重要となります。

学校評価の実施方法は、「学校評価ガイドライン」(平成28年3月文部科学省)で、具体的な評価項目・指標等の設定について検討する際の視点となる例が12分野にわたり示されています。

P D C Aサイクルの視点から、全教職員が各学校で設定している評価項目・指標を意識し、カリキュラム・マネジメントと関連付けて学校評価を実施することが重要となります。

※【例示されている12分野】

- ①教育課程・学習指導, ②キャリア教育(進路指導), ③生徒指導, ④保健管理,
- ⑤安全管理, ⑥特別支援教育, ⑦組織運営, ⑧研修(資質向上の取組),
- ⑨教育目標・学校評価, ⑩情報提供, ⑪保護者, 地域住民等との連携,
- ⑫環境整備

ジョハリの窓

客観的に学校文化を知る

「社会に開かれた学校」がカリキュラム・マネジメントでは、大きなテーマです。学校が社会に開かれるためには、社会から見た学校における教育活動はどうかを理解する必要があります。

教職員による分析・評価の結果と校外の人に学校教育活動の評価とを統合して、質の高い教育活動を創造していくために、学校評価等で、ジョハリの窓の発想を活用してみましょう。



自分が知っていることは、学校教職員の視点です。他人が知っていることは、学校外の人の視点になります。

実施方法は、以下の2パターンがあります。

- ① その人に対して感じていること、印象、性格などを自由に記述する方法
- ② あらかじめ人の性格・能力の要素(複数の項目)を決めておき、該当するものを選択する方法

作成されたデータを以下の法則で、それぞれの欄に当てはめていきます。

	教職員が書いた内容	教職員が書かなかった内容
校外の人が書いた内容	開放の窓に書き込む	盲点の窓に書き込む
校外の人が書かなかった内容	秘密の窓に書き込む	未知の窓に書き込む

3. 人的・物的資源の効果的活用の観点からのアプローチ

① 全員が参加することの意義



マネジメントというと「経営」とか「管理」が連想されるため、カリキュラム・マネジメントは「管理職の役割」と考えられてしまう傾向があります。

各学校におけるグランドデザインの作成や教育課程の編成では、学校全体を俯瞰するカリキュラム・マネジメントの主体は管理職といえます。

しかし、グランドデザインや教育課程を具現化する実施主体は誰かということ、授業づくりや学級づくりなどで日々の実践につなげる教職員一人一人です。

つまり、教職員一人一人がカリキュラム・マネジメントを理解し、「自分事」として取り組むことが重要となります。

学校の目指す教育目標の実現に向けて、教職員一人一人が日々の授業等についても教育課程全体の中での位置づけを意識しながら取り組むことで、教育効果の最大化を図ることができるのです。

全ての教職員で創り上げる各学校の特色について

○「カリキュラム・マネジメント」の実現に向けては、校長又は園長を中心としつつ、教科等の縦割りや学年を越えて、学校全体で取り組んでいくことができるよう、学校の組織や経営の見直しを図る必要がある。そのためには、管理職のみならず全ての教職員が「カリキュラム・マネジメント」の必要性を理解し、日々の授業等についても、教育課程全体の中での位置づけを意識しながら取り組む必要がある。また、学習指導要領等の趣旨や枠組みを生かしながら、各学校の地域の実情や子供たちの姿等と指導内容を見比べ、関連付けながら、効果的な年間指導計画等の在り方や、授業時間や週時程の在り方等について、校内研修等を通じて研究を重ねていくことも重要である。

○このように、「カリキュラム・マネジメント」は、全ての教職員が参加することによって、学校の特色を創り上げていく営みである。このことを学校内外の教職員や関係者の役割分担と連携の観点で捉えれば、管理職や教務主任のみならず、生徒指導主事や進路指導主事なども含めた全ての教職員が、教育課程を軸に自らや学校の役割に関する認識を共有し、それぞれの校務分掌の意義を子供たちの資質・能力の育成という観点から捉え直すことにもつながる。

※中教審答申(平成28年12月)

② 教育内容、時間、情報、予算、人材など教育に必要な資源の再配分について

小学校学習指導要領第1章第1の4では、「教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと」と示されています。

これは、小学校学習指導要領解説総則編では、資源という言葉を使って、カリキュラム・マネジメントの3つ柱の一つとして、実践を可能とする資源(人・金・物・時間・情報)を確保することが重要だと示されています。

教育の分野では、「資源」はなじみの薄い言葉といえるでしょう。

「資源」とは、一般的には、「人・物・金・時間」の4つといえ、民間企業は「利潤を上げる」ために、この限られた「資源」をやりくりしています。仮に無限の資源が与えられるのなら、目標を達成するためにそんなに苦労しませんが、与えられる資源が少ないとマネジメントの才能が必要となってくるわけです。



そこで、学校にとっての「資源」とは、何かを改めて考えてみましょう。カリキュラム・マネジメントの充実に必要な資源は、まずは、「人」、「教師の指導力」といえます。同時に、社会に開かれた学校という考え方に立つと、地域ボランティアなどの、教育支援に関わっていただける方々といえます。

教師の指導力は、絶え間ない研修に形成されていきます。また、ボランティアの方々に効果的に機能していただくにも、協働という視点での教師とのお互いの研修が重要になります。その意味で、教職員に求められる内容は、研修の環境をいかに全員で作り出すかであり、研修への意欲化そのものです。研修から、学びの資源である地域素材を見いだすこともあるでしょう。

次にマネジメントしやすいのは、「時間」です。たとえば教師の指導力を資源として確保するためには、業務の見直しで、どうしても教員がやらなくてはならない内容、ボランティアなど外部の人に任せることができる内容について精査し、教員の負担軽減を目指すことも大切なことです。



また、外部資金等の獲得による教育環境の充実や、教育活動充実のための ICT の活用へボランティアなどの校外の人材の積極的な参加など、教育の在り方について大きく舵をどこまで切れるかが問われている時代になっています。

